・留学期間：2 年次　春期
・所属学科：総合社会学科

英語とフランス語が混在する街

今回、私が参加した 1 カ月間のプログラムは、モントリオールにあるマギル大学で英語を学びながらカナダの文化も学ぶことができる満足感の高いものだった。月曜日から金曜日までの簡単なスケジュールは、午前中大学で英語を学び、午後からマギル大学周辺の観光地、またはアクティビティを行った。週末は、ホームステイ先にもよるが基本的に自由だったため友人と買い物に行くことが多かった。モントリオールの冬はとても寒く、最初の 2 週間はマイナス 14、15 度という日も珍しくなかった。街は一面雪だらけという風景だった。しかし、後半の 2 週間は寒くてもマイナス 5 、6 度など暖かいと感じる日が多くなった。道路にあった雪はすべて溶けて、時々違う国に来たのかと錯覚するほど景色が変わっていた。また、モントリオールは英語と同じくらいフランス語が話されていた。そのため、バスや電車の標識は基本的にフランス語で、横に小さく英語が書かれており英語しかわからない私にとっては意味のない標識となっていた。多くの人が英語とフランス語の 2 か国語を話すことができ、バスの運転手やお年寄りの方はフランス語しか話せないという人もいた。

地元の小学生に折り紙を教える

このプログラムのメインである語学学習は、参加者の中で 2 つのクラスに分かれ 1 日約 3 時間の授業が行われた。今回驚いたのは、語学学習の中に Pronunciation（発音）の授業があったことだ。発音の授業では、日本人にとって難しいとされる R と L の発音について学び、一つ英語の単語を選び、その単語と同じ発音の単語はどのようなものがあるかなど、これまであまり触れてこなかった英語を知ることができた。また、発音と同じくらい学んだのがリスニングである。カナダの料理、動物、お金といった様々なテーマの文章を聞き、質問が書かれた紙に書き込むという作業を行った。この授業でとてもリスニング力がついたと感じられた。加えて、自分が聞き取れた内容を相手に伝えるという授業もあり、スピーキング力も養われた。
語学学習は主に先生が授業をしてくれるものだったが、それだけではなく私たち生徒が授業を行う機会があった。この授業は「Teacher For a Day」というもので、地元の小学校へ行き私たちが英語で授業をするというものだった。グループに分かれ、与えられたテーマについて調べ物をして授業を行った。私のグループは、天然資源について小学 2 年生に授業をした。カナダ特有の天然資源や日本の天然資源について調べ、2 年生に分かってもらうにはどうしたらいいのかグループで話し合った。その結果、天然資源から「紙」に行きつき、紙から日本の伝統文化でもある折り紙にたどり着いた。当日は、1 クラス 30 分の授業を合計 4 回行った。まだ 2 年生ということもあり、折り紙は難しいと感じるようだったが大きな問題も起こらず終え

ることができた。英語を学ぶだけではなく、英語で教えることは非常に大変だったが勉強になることばかりだった。

頼れる「モニター」（学生サポーター）の存在

マギル大学にいる間、私たちにはモニターという現地の大学生がついてサポートをしてくれた。日本人学生５人に対して現地の大学生２人がサポートをしてくれて非常に贅沢だった。モニターの中には、マギル大学の学生もいれば、近くの他大学の学生もいた。モニターは、主にアクティビティの時に私たちをサポートし、授業外にもモントリオールの街を案内してくれた。モニターと話したいという思いから英語を努力しながら話して、文法などが間違っていたらその場で直してくれたりと、とても頼もしい存在であった。

楽しかった課外活動

語学学習と同じくらい時間を使ったのが、アクティビティである。このプログラムの魅力の一つでもあるアクティビティでは、本当に様々なことを体験することができた。美術館や大聖堂に行き、また別の日には雪山を散策し、マギル大学周辺を使ったレースとして全力で走ったりと非常に楽しいものばかりだった。マギル大学から電車を使って 20 分ほどの場所にノートルダム大聖堂がある。私はこのノートルダム大聖堂で行われたAURA というプロジェクションマッピングにとても感動した。また、カナダのラジオ放送局へ行き、実際に収録が行われている場所で模擬ニュースを作った。この体験は私にとって貴重な体験になり、そして印象深いものになった。一人一人が１つの分野（天気、ニュースリーダー、人類学など）について説明し、カメラ役も学生たちで担当をした。実際にカメラで撮られている中で、不慣れな英語を話すのは、ただ英語でコミュニケーションをはかるよりも遥かに難しかった。しかし、それ以上に楽しいものになった。
また、モントリオールだけではなくケベックやオタワなど少し離れた街に日帰り旅行で行った。ケベックでは、アイスホテルを見学したり、オールドケベックシティなどを歩いた。日本では絶対見ることができないような街並みでとても楽しかった。

ホームステイでの思い出

大学の次に多くの時間を費やしたのがホームステイである。ホームステイは、それぞれの家ごとでルールも違ったため、参加している学生との話題の多くがホームステイについてだった。私のホームステイ先は３人家族で 12 歳の女の子がいた。お互いの学校について会話をすることがあったが、想像していたよりも話すことができなかった。それは私の英語に対する劣等感があったからである。ホストマザーやホストファザーと思うように会話ができなかったのも英語に自信がないという思い込みがあったからだ。カナダに来て２週間が過ぎ、

これではカナダに来た意味がないと思った。たとえ私に英語力がなくてもホストファミリーは簡単な英語で物事を伝えてくれた。後半の２週間は、自分の英語力を全て使いながらホストファミリーと会話をしていた。頭を使い過ぎて毎日疲れていたが、英語に対しての劣等感、自信のなさは無くなり前半の２週間よりも充実していたと感じることができた。私のホームステイ先には他国からの留学生はいなかったが、他の学生に聞くと韓国や中国、コロンビアなどからの学生も一緒に住んでいたため、そこでも英語力が養われたと話していた。大学で学ぶ英語は日本で学ぶ英語の応用したものだったが、ホームステイ先での英語は日常生活で必要なものだった。勉強のためだけではなく、生活するための英語というのは私にとって新鮮に感じた。

名物料理も堪能

１カ月の間ホストファミリーが月曜日から木曜日までランチを作ってくれたが、金曜日はカナダの料理を食べようという日が設けられていた。私はカナダの料理が何か知らずに行ったのだが、３つほど有名なものがある。「Poutine」「Bagel」「Smoked meat」の３つだ。Poutine は、フライドポテトに四角く切ったチーズをのせてその上からグレイビーソースをかけて食べるカナダ料理である。ハイカロリー、ハイファット、ハイソルトと現地で説明されたのだが、カナダに住んでいる人は頻繁に食べているそうだ。ファストフード店のメニューには必ずと言っていいほど Poutine があり、食べ物からも日本との違いを感じた。
こうしてこのプログラムは、午前中大学で英語を学び、午後はアクティビティを行うなど丸一日いろいろな体験ができた。ただ、学校が早く終わる日もあったため、友人とマギル大学周辺の街を散策したりと自由な時間も設けられていたことは、カナダを楽しむ一つにもなっていた。

はずかしさを乗り越える

毎日充実していたが、カナダでの生活が全てよかったわけではない。今回一番後悔しているのは、ネイティブの人に自分の英語力の無さを知られるのは恥ずかしいと思っていたことである。どこかで見栄を張っていた部分があり、失敗するなら話さないほうがいいと思っていた。しかし、話さなければ英語は上達しない。どこかで何度も聞いてきたことだが、「間違ってもいいからとにかく話してみる」はとても大事なことだと実感した。カナダでの１カ月は英語や文化を想像以上に学び自分の中で多くのものを吸収することができた。しかし、それだけではなくこのプログラムの最大のメリットでもある他大学の学生との交流が、私に大きな影響を与えた。今回は、関西から参加したのが自分だけだったということもあり、到着まで緊張していたが、すぐにみんなと打ち解けていた。たった１カ月だと思っていたが、語学を学びながら、モントリオールの街を隅から隅まで見ることができたと思えるほどアクティビティも行い、これまでで一番濃い１カ月となった。